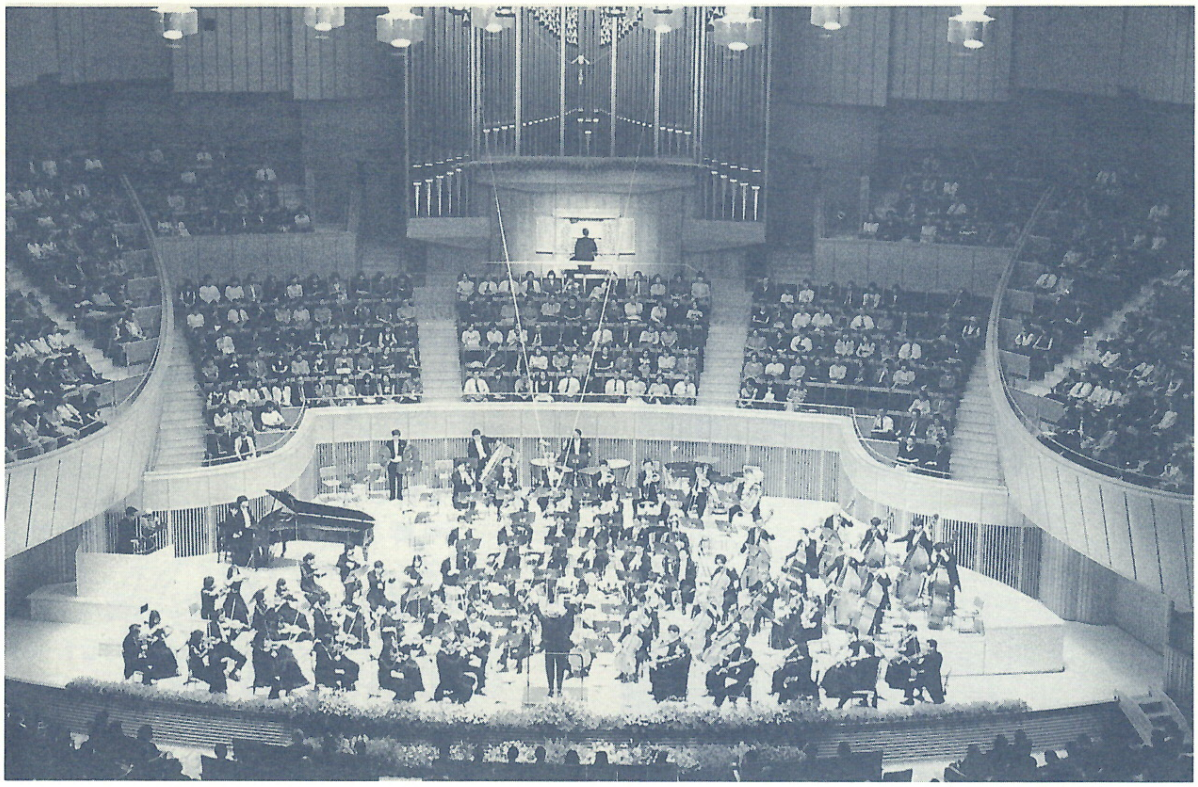
97-09

札響くらぶ

第3号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772



札響がこけら落としの演奏！

「札幌コンサートホール」オープン

去る7月4日金曜日、音楽専用ホールとなる札幌コンサートホール「Kitara」の落成記念式典が行われました。式典や中学生らによる吹奏楽演奏に続き、札響と市民合唱団によるベートーベンの「第九」が演奏されました。

この日の夜には、札響による「こけら落としコンサート」が行われ、Kitaraの顔であるパイプオルガンの音色も披露されました。観客席が震え、会場が揺れるような重厚な音を聴かせてくれたサン＝サーンスの交響曲第三番「オルガン付き」を始めとして、リヒャルト・シュトラウスの祝典前奏曲、モーツァルトのフルート協奏曲などが演奏されました。

「さすが音楽専用ホール！」とうなってしまうほど、素晴らしい響きです。また、ステージの楽器の音だけではなく、観客席の音も非常によく響くホールという印象を受けました。Kitaraで素晴らしい演奏を楽しむためには、いい音と私たち聴衆のマナーが必要なのだなぁと痛感させられました。

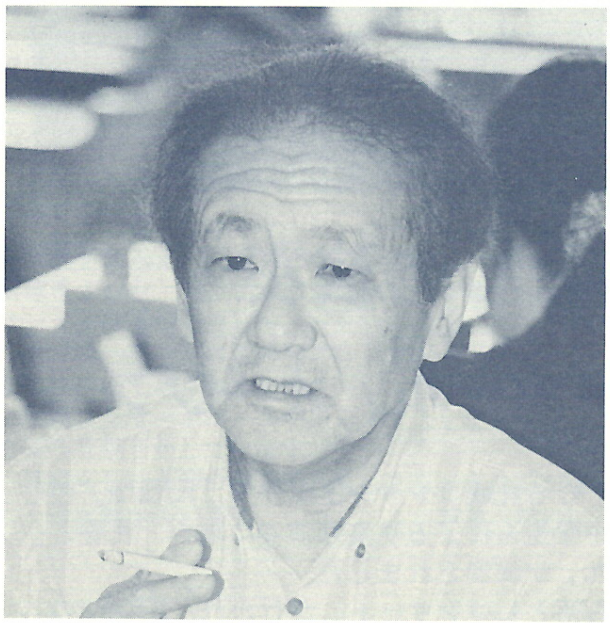
この素敵なホールが、名実ともに札響の本拠地となるよう応援しましょう。

指揮者にきく

コンサートホールのできた今年が本当の札幌の音楽元年

岩城（いわき） 宏之（ひろゆき） さん

札響桂冠指揮者



岩城宏之さんのプロフィール

1932年東京生まれ。
東京芸術大学音楽部打楽器科に学ぶ。
56年N響を指揮し、デビュー。
63年N響指揮者に就任。
75年10月札響正指揮者に就任。
78年10月音楽監督正指揮者、81年８月音楽監督を経て、88年４月桂冠指揮者に就任。
現在、N響終身正指揮者、メルボルン響終身桂冠指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督、東京混声合唱団音楽監督を兼ねる。

1997年７月12日、芸術の森アートホールでのストラヴィンスキーの三大バレエ曲のリハーサルの合間に、札響桂冠指揮者の岩城宏之（いわき ひろゆき）さんに、お話をうかがいました。

岩城さんは、７月15日に、札幌コンサートホールで行われた札響第393回定期演奏会の指揮をなさいました。

―― 岩城さんが札響の指揮者や音楽監督をなさっていた頃は、定期演奏会の会場はもう厚生年金会館でしたか。

岩城 初めてゲストで来た時は、まだ市民会館でしたが、札響の指揮者を引き受けてからの12年間は厚生年金会館でした。1972年の札幌オリンピックの開幕式が厚生年金会館であって、武満徹さんがこのために書いたウィンターという曲を、僕がN響と、演奏したんです。

北海道的な音とは？

―― 札響との長いお付合いで、印象に残っていることは何ですか。

岩城 札響の音楽監督をしている間中、新聞記者など色々な人から、「北海道的な音楽をめざしますか。」という質問をされることが多かったんです。これはナンセンスで、「北海道的な音とか、札幌的なベートーヴェン、N響的なベートーヴェンというのもない。そういうことはめざさない、きちっと、楽譜を再現して、心を込めて、より良い演奏をするだけ。」と答えて、全部そういう質問は退けてたんです。

でも不思議なことに、やはり、オーケストラには、そのオーケストラが母体とする土地や風土が微妙に関係するので、たまに東京に札響が来ると、僕は行ける時は聴きに行くんですが、札響は、北海道的な、緑の多い、土地の広いというおおらかな、しかも、さわやかな音がしてますね。

印象に残るオール武満の定期演奏会

―― 札響を指揮された中で、印象に残っている演奏や曲はありますか。

岩城 そうね、やはり印象に残っているのは、札響の指揮者になって、たしか２年目くらいに定期でオール武満をやったことです。（注：1976年12月）

その時は、みんなが、そんなものをやる

のは無茶だと、反対した。武満さんだけのプログラムを組んだのは、当時は、おそらく世界で初めてくらいだったんです。東京のいろんな関係者なんか、岩城は札響をそうやって潰す気だろうと言ってたんです。武満さんも来てくれたし、ふたを開けたら、それまでの定期の中で、一番たくさんお客さんが来た。しかも、それまで、そういう音楽会がなかったから、東京からも3つくらいのグループが聴きに来た。

しかも札幌の翌日、同じプログラムを函館でやったんです。それも良かったしね。それが一番印象に残ってますね。

―― 私も、その定期に行きました。ノヴェンバー・ステップスで琵琶を演奏した鶴田錦史さんが、とても凛々しい女性だったのが印象的でした。

札幌のお客の反応は、いかがですか。

岩城 札響は、僕の頃は、世界で最も多く、武満を演奏したオーケストラだったし、僕がやっていた時は、必ず現代ものを入れていたから、お客さんも慣れてきて、現代ものをやっても、非常に反応が良かったですね。

最近は、全然やっていないらしいから、そういうことは駄目になったかもしれない。

―― 札響と、道内のあちこちの町に行かれたと思いますが、一番遠くは、どこまで。

岩城 利尻島と礼文島です。利尻島と礼文島でオーケストラの音を響かせたのは、我々、僕と札響が史上初めて。（注：1980年7月）

世界の一流クラスのホールは怖い！

―― 15日は、札響の定期としては、中島公園にできた新しいコンサートホールを使う、

芸術の森アートホールでのバレエ音楽「ベトルーシュカ」のリハーサル風景

初めての演奏会ですけれども、中はご覧になりましたか。

岩城 ええ、この1月に札響と函館でやった音楽会の練習があそこでしたから。

とてもいいですよ。完成したら、間違いなく世界でも指折りのクラスになると思います。

―― 札響への注文は、何かありますか。

岩城 いいホールというのは、いい音をますます良くするし、悪い音はすぐばれて、ますます悪くするので、大変なんです。世界の一流クラスのホールができたということは、それだけオーケストラにより重要な責任が負わせられたということです。そのことを常に自覚して、いい音を出すことを常にやってもらいたい。

だから、このコンサートホールができて、本当の意味で、札幌の音楽元年になるんじゃないですか。

それと、何でも東京がいいという訳ではないけれど、札響も、もっと、北海道だけではなく、全国規模の活動を常にしてほしいです。

―― 札幌のクラシック・ファンに何か一言。

岩城 そうですね、色々な催しも行われるでしょうから、いいものを、よりいいものを聴こうと思ってほしいですね。妙な宣伝に騙されて、変なものが満員になったりするようなレベルはなくなってほしいと思います。はっきり言って、まだ札幌のお客のレベルは高くない。

札響は、北海道共和国という570万人の国の首都のオーケストラなのだから、みんなで自分たちのオーケストラをもっと大事にしてほしい。

オーケストラ・アンサンブル金沢は世界をめざす

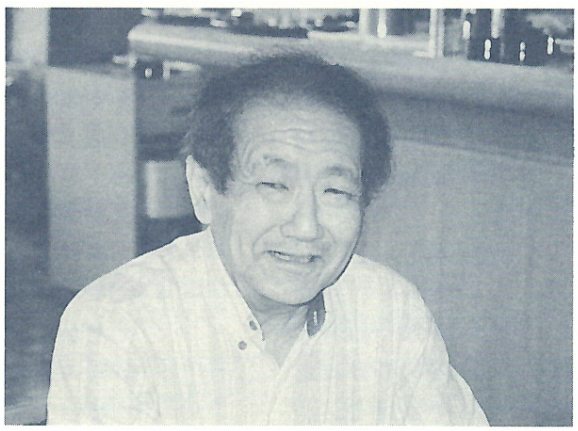
―― 音楽監督をなさっているオーケストラ・アンサンブル金沢の札幌公演が9月にあり

ますね。私もチケットを買って、楽しみにしていますが、楽員は金沢の方が多いんですか。

岩城　全然。作ることになって、まず、金沢にアマチュアのオーケストラが3つくらいあるから、そこからうまい人を選んでと言うんで、アマチュアとプロっていうのは、まったく動物として違うんだから、プロでなければダメだと。じゃあ、石川県出身の人を集めてと言うんで、それもとんでもないとね。

だから、金沢では、結果として、オール日本、オール世界から募って、色々欠員ができたりするので、合計すると、これまで1,900人くらいオーディションをしている。

今、楽員の1/3くらいは外国人ですし、石川県出身というのは2人いますかね。僕は、特に日本人の場合、履歴書を見ないし、どこの出身かは関心がないから。



僕は、金沢という、京都に次ぐ日本の文化都市、伝統のあるところにオーケストラを作っているんだけれども、金沢じゃなくても、たとえば香港でもパリでもどこでも良かった。要するに、金沢から、日本全体の文化に、世界にということで、ローカル意識は全然ないんです。

僕は札響を12年やっていたけど、札響を良くするために一所懸命になったのであって、札幌とか北海道を愛した訳ではないんです。金沢も同じことです。結果として両方とも愛したことになります。

財政的危機にないオーケストラなんて、世界にないですからね。オーケストラって、おもしろいもので、うまくなればなるほど、赤字が増えるんです。赤字を出さないため、やるのなら、最初からオーケストラをやらない方がいい。どこのオーケストラもうまくなればなるほど、お金がいるものだということを、やっと石川県や金沢市もわかってきた。

——　お好きな作曲家や曲は。

岩城　しいて言えば、やっぱりストラヴィンスキー、バルトーク、メシアンだとか、20世紀のまん中ぐらいからの作曲家の方が好きです。もちろん、ベートーヴェンなんかも好きだけど。

もしかするとジャズ・ドラマーに

——　岩城さんにお会いするというので、前に岩波新書で出された「フィルハーモニーの風景」をもう一度パラパラと読み返して来たのですけれど、芸大の打楽器科で、亡くなったジャズドラマーの白木秀雄さんと同期だったそうですが、ジャズドラマーになっていた可能性はありますか。

岩城　それはないです。白木がワァーッとスターで出て来た時、もう一人芸大でジャズ好きがいるというので、ジャズのマネージャーから、新しくできるフルバンドのドラムで、白木と競わせたらという話が一時あったんだけど、ちょうど僕は、近衛さんのオーケストラに入っていたので、3日くらい考えて、僕のフィーリングは、やっぱりジャズには向いていないからと断ったんです。今、思えば、それは多分シャープス&フラッツのことだった。だから、ジャズ屋さんにはなる気はなかったんだけど、指揮よりも僕はティンパニを叩く方が好きですよ。

——　オフの時には、何をなさってますか。

岩城　8月は3週間ずっと軽井沢にいて、その時はゴルフばっかりやっています。

いつも、この頃、札幌に来ると、定期の翌日、みんなとゴルフ大会をやるんですよ。みんな楽しみにしているようです。

《臨時インタビュアの感想》

リハーサルの合間、芸術の森のレストランでのランチタイムにお邪魔して、インタビューさせていただきました。（メニューはラーメンとアイスコーヒー）

札響や札幌のクラシック・ファンへの辛口の愛のムチ発言からは、「僕は札響から離れているけれど」と言いながらも、やはり気にしてくださっていることが伝わってきましたし、何事にも真剣に立ち向かい、真剣に怒る、岩城さんの迫力に満ちたお話を聞かせていただいた45分間でした。　（T.K.）

■札幌コンサートホールを知ろう（下）

市民の願いがかなう

竹津宜男

去る７月４日(金)に札幌コンサートホールは指揮秋山和慶、演奏札幌交響楽団で、サン＝サーンスの交響曲第３番「オルガン交響曲」で華麗にオープンしました。

このホールの建設に当たって、札幌市は有名な建築設計家に設計を依頼することを避け、使い勝手の良い、ホール音響を最重視した建築設計をコンペで選ぶことになりました。

札響の定期演奏会は札幌市民会館で始まり、その後、北海道厚生年金会館（厚年）のホールに移りました。厚年は札幌オリンピック開催に合わせて作られた客席が2,300席の立派なホールなのです。しかし、音響に配慮された設計になっていないため、定期演奏会の会場が厚年に移ってから、会員の皆さんから、ホールの音がもっと良くならないのですか、との声が強く、この声はやがて「札響にふさわしいコンサートホールを建てよう」と「札幌シアター・パーク・プロジェクトＳＴＰ」(1990年)に発展し、５万人の署名と100円募金運動に展開しました。定期会員の皆さんのコンサートホールが欲しいという情熱は、定期演奏会の会場で争い合うように署名用紙と募金袋を受け取り、翌月の定期演奏会の時に届けて下さり、目標の５万人署名はわずか２カ月で集まりました。

この運動の始まる10年ほど前には、札幌青年会議所が「都市文化委員会」で「札幌の文化を考える」運動を始めました。札幌から世界に向けて発信できる可能性のある文化は札響であり、札響のグレードアップを図り、更に市民に親しまれるようにするために、青年会議所は何をすべきか、と真剣に討論を重ねました。結果、まず札響を中心にした、文化の創造と研修の場として「札幌芸術の村」構想を札幌市に提案しました。

この提案は「札幌芸術の森」(1986年オープン)として実現し、その中には札響が優先的に使用できる練習場が出来ました。札幌青年会議所のメンバーの一部と私達は札幌にふさわしいコンサートホールはどのようなものか、との勉強会も始めました。

札幌青年会議所は、更に「交響詩さっぽろ」（1988年～1992年）を作る運動を始め、市民の関心を札響へ向けよう、と努力しました。1988年にはコンサートホールを作る運動母体として、プロ・アマを問わず北海道の全ての音楽団体を一つにまとめた組織「北海道音楽団体協議会(音団協)」が出来ました。事務局長の岡崎豊治の熱心な呼びかけで、勉強会はほぼ毎週行われました。また、同時に音楽祭などへの対応が出来る組織「北海道国際音楽交流協会ＨＩＭＥＳハイメス」も旗揚げしました。

札幌青年会議所のメンバーだった北海道開発コンサルタント（開コン）の宮部光幸氏に、途中からサントリーホールの音響設計を担当した永田音響設計の豊田泰久氏も加わって、理想的な音響と使い勝手の良いホール作りについて、議論は深夜に及ぶことも度々ありました。この勉強の成果は、設計コンペに現れました。ホール設計の専門会社とされる日本を代表するゼネコン数社の設計提案を尻目に開コンが圧倒的多数の審査員の票を獲得して選ばれました。長年、共に勉強してきた建築設計者が中心になって設計を担当することになり、その後、音響設計も豊田氏が担当することになりました。建築設計や音響設計を担当した若い技術者のこれまで世界に例のない、音の良い、使いやすいホールを作りたい、との「思い」が札幌コンサートホールの形になりました。また、札響ファンの「思い」はオープニングコンサートのチケットを２時間足らずで完売させる形で表れました。

オーケストラなんでもQ&A

Q. 札響は年間何回ぐらい演奏会を開きますか

A. 年間120回ぐらいです。定期演奏会が11回、名曲シリーズが4回、第９演奏会が1回、３月に行われる特別演奏会が1回行われています。この他に道内外様々なところで大小数多くの演奏会を開催しています。

Q. 札響の団員はどのように募集しているのですか

A. 公募です。必要に応じてオーディションを行います。団員の皆さんが審査員です。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　ヴァイオリン奏者
水谷（みずたに） 正志（まさし） さん

札響で、コンサートマスターから向かって左、3番目に座っている、第一ヴァイオリンの水谷です。

ＮＨＫの放送管弦楽団から札響へ

僕は樺太の恵須取（えすとる）生まれで、終戦の翌年、小学校入学の年に札幌に引き上げて来ました。今だと、ヴァイオリンを小学校入学前、遅い人でも小１くらいから始めますが、当時は、それどころではなくて、10歳、小学４年生から始めました。千歳にいる従兄弟が楽器を色々やっていたらしくて、ヴァイオリンを家に持って来てくれたのが、きっかけで習い始めたんです。

その後、学芸大、今の教育大の特設音楽科を出て、ＮＨＫの札幌放送管弦楽団に入りました。当時、ＮＨＫが全国に何箇所か録音の仕事を主にする管弦楽団を持っていたんです。

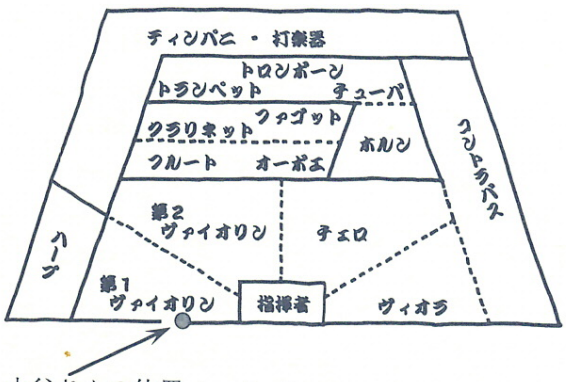
札響に入団したのは、当時の事務局長から引き抜かれたのがきっかけで、ヴァイオリンの山下さんと一緒に30年前に移りました。

花も嵐も踏み越えて、大変だった演奏旅行

昔は、道内での仕事が少なかったせいなのか、東北など本州に出かける長期の演奏旅行がたくさんあって、僕が札響に入った時の一番最初の仕事は、東北旅行だったんです。新入団員歓迎会は青函連絡船の中でした。

旅費が安くて、電話でホテルや旅館に予約して泊まれるような状況ではなかったので、行く先々で毎日、５～６人が交代で宿代値下げの交渉をしたり、泊まらなくてすむように、夜行列車を利用してグルグル回っている人もいました。その頃は若かったから、まあ、楽しかったですけどね。

水谷正志さん・瑛子さん



水谷さんの位置（コンサートマスターから数えて３人目）

札響の配置

燕尾服の裏地も破れる重労働

札響の楽員の制服は厳密に言うと４着、グリーンコンサートのＴシャツを入れると５着になります。燕尾服、黒のタキシード、夏用の白のタキシード、その他に銀色の長いネクタイをするブラックスーツがあって、音楽教室などはこのスタイルが多いです。

僕の今の燕尾服は３着目です。背をわりに椅子につける方なものですから、背中の部分がすれるんですね、表側は何ともないのに、裏地がすれてボロボロになって、洗濯屋さんにもカッコ悪くて出せなくなってしまったんです。札幌には、燕尾服をオーダーできるところは少なく、我々には高価だったので、数年前に、ヨーロッパから夏休みで帰って来る知り合いに、体格も同じだったので、既製品の燕尾服を買って来てもらいました。

小説のモデルになったかもしれない？カミさん

第二ヴァイオリンの、もう一人の水谷は妻ですが、彼女が札響に入ったのは結婚後ですから、職場結婚ではありません。子どもの時からヴァイオリンをやっていて、北大の学生オーケストラに、高校生の頃、セーラー服姿で、エキストラとして出ていたんです。

僕も又、そのオーケストラにエキストラで行っていたので、その頃からの知り合いで、まあ、幼なじみのようなものです。

何年くらい前だったか、道新に、原田康子さんの「日曜日の白い雲」という小説が連載されていた時、実は、僕たち夫婦がアドヴァイスさせていただきました。若いヴァイオリニストがヒロインだったので、このくらいの経験をして、こういう学校を出た人なんだけれど、楽器はどんなのを持ったらふさわしいのか、弓のメーカー、オーケストラの位置関係など、色々尋ねられました。連載が終わって、単行本になった時、後書きに、妻の名前を出して、モデルではないと断り書きがありました。女性が主人公だったから、ウチのカミさんがモデルだと思われていたようです。

今、札響で、夫婦で楽員なのは２組ですが、同じオーケストラにいると、お互いに、どこで何をしているか全部わかってしまいますね。

from「札響くらぶ」

当「札響くらぶ」が設立されて１年が経過しました。私たちがこよなく愛する札幌交響楽団が、より多くの方々に親しまれ札響発展の支えになりたい、そんな想いで活動を続けて参りました。この札響の活動の中心となる場としてのコンサートホールも完成しました。残るは、札響の演奏活動をささえるリスナーの幅を広げ数を増やして行くことです。オーケストラの面白さ、音楽の楽しさを札響の演奏に接するなかで広めて行きたいと思っています。この１年の間に会報を３回発行し、札響の楽員とくらぶ会員のミニコンサート付き交流会を２度持ち、ふれあいの中でますます「私たちの札響」という気持ちが持てるようになったと、参加者から好評を得て参りました。今後とも、同様の交流会を年間２度ほど企画していきたいと思います。また、ファンなら一度は見てみたい「札響のリハーサル」。近々**「リハーサル見学会」**を企画したいと考えております。会員だけの特典です。ぜひ多くの方々に「札響くらぶ会員」として、当くらぶ２年目の活動にご参加いただきたいと思います。

入会受付は、札響事務局または定期演奏会会場で行っております。年会費2000円。

札響物語　Ⅳ

札響三人のファウンダー（上）

札幌交響楽団の初代理事長はＨＢＣの初代社長故阿部謙夫氏で、氏はかつてアメリカで都市工学を学ばれた技術者でした。北海道新聞社の社長から北海道で第１号の民放の社長に就任し、民放の充実と発展に大きな貢献をされました。札幌の都市計画についても「大都市化する前の早い時期に、環状の交通機関を作り、主要な道路とターミナル駅の隣には広大な駐車場を作り、仕事以外の自家用車が街の中に入らないように工夫しないと、交通渋滞を避けられず都市としての機能が低下することになる」と常々説いていらっしゃった。同時に、日本の文化や政治が東京一極に集中することに批判的で、地方での文化活動の充実を願っていらっしゃいました。札幌交響楽団の理事長に就任されてからは、どんなに仕事で忙しくても、社内の重要な会議を途中で切り上げても、定期演奏会には足を運ばれました。主だった社員の方々に「札響にぞっこんなんだから」とぼやかれたこともありました。また、札響の運営資金として、ＨＢＣからは毎年多額の寄付金が寄せられていました。

創立から５年間、定期演奏会の翌日には必ずＨＢＣのホールで定期のプログラムのビデオ撮りがあり、自主番組として放送されました。故阿部理事長は札響創立10周年記念演奏会に姿を見せられましたが、翌年１月にお亡くなりになりました。　（Y.T.）

FAN NETWORK

新ホールへの期待

「新しくできる音楽専用ホールにパイプオルガンを…」という文書に署名したのは何年前だったでしょうか。

あのころは、私にとってはまだ「そんなホールが出来たらいいな」という程度のことでした。

今年の冬のある日、たまたま中島公園を通り抜けているとき、夕闇に包まれた木立の向こうに黒々とした大きな建物と、その広い窓ガラスからの明るい光が目に飛び込んできました。それは、しばらく足を止めて見入ってしまったほどの夢のような風景でした。

「これは何だろう？」

「新しくできる音楽ホールだ」と気づいてようやく現実に引き戻され、近づいて見ると、まだ囲いも半分はずされただけ、明かりは内装工事の作業をしている為とわかりましたが、あの一瞬の夢幻的な光景は今も思い出すことが出来ます。

そして6月、思いがけず総合リハーサルのチケットを頂いたのです。

初めて足を踏み入れた札幌コンサートホールは期待通りのすばらしさでした。

壁も床も木の色が美しい大ホールでの札響の演奏。席は3階の隅の方でしたが、ポピュラーすぎてさほど好きでもなかった「新世界」が温かく大きく私を包んでくれるようで、「こんなに心地よい曲だったのか」と満足し音楽に浸りきった至福の時を過ごしました。

「こけら落としコンサート」はチケットが手に入らず涙を飲みましたが、「オープン記念コンサート」は聴きました。パイプオルガンの「レクチャーコンサート」にも行ったし…。

今、私の机の前にこの秋のコンサートのチケットが2枚止めてあります。

札幌コンサートホールが出来てすこし忙しくなったような感じがしています。

素晴らしい札響の演奏で、もっともっと会員が増える事を願っています。

会員　M.U.

新しいホールで

5月、盤渓での楽団員との交流会はとても楽しかったけれど、その時に入手したコンサートホール総合リハーサルのチケットを毎日のように眺めておりました。とても楽しみだったのです。

6月19日、家を早めに出てパークホテルによって腹ごしらえをしていると、普段とは違って少しオシャレをしたご婦人方に出会い、これはきっとコンサートホールに行くんだなあーと思いました。案の定みんなの足は軽やかにホールの方へ向かっていました。が、ふと冬はこの公園内はどうなるのかなと少し雪のことが頭をよぎりました。

入場してからキョロキョロとホール内を見学してみました。設計事務所に勤めていた友人から新しいホールでは必ずトイレを見る事と云われていたのでまずトイレ。数も多く、化粧台もスッキリ合格だと思っていたら、1階も2階も女性用はステージに向かって左側、男性用が右側にあり、（3階の方には行けなかったので上の方は分からないが）これはちょっと不便、エレベーター、エスカレーター、車椅子の通り具合など、音の方は耳の良い方々におまかせして、もっぱら使い（？）勝手をチェック。ホール案内のお嬢様方もまだ慣れていなくて、座席を行き過ぎてしまって、まあ仕方がないか。

座席に座り、ぐるりと見渡して一瞬どこか他の土地のホールに居るような錯覚を覚えたが、ちょっと目をこらすと、あっあの顔も知ってる、あっあの人も来ている。やっぱり札幌なんだと思った。札響の演奏だってなんだか初めてのオケを聴いているような気がした。少し大ゲサかな、とても良かったと云う事。演奏が終わって、お約束のスタンディング・オーベーションの時が来た。‥‥隣も前も誰も立たない、見廻したらステージ上のP席で3名、少し離れている所で2名。3階はどうだったのか。約束を守ったのは何人だったのでしょう？言い出しっぺのくらぶの事務局長さんごめんなさい。

会員　M.S.

編集後記

新しいホールができ、云いたいこと書きたいことがいっぱいあり過ぎて、ちょっと盛り沢山になった「札響くらぶ」です。誌面に納めるために、泣く泣く文章を削ってしまったところもあります。原稿を書いてくださった方々におわび申し上げます。

会員の声を紹介するFan Networkにも、いっぱい書いていただき、ありがとうございます。できる限り、会員の生の意見を載せたいと思い、ここだけは、極力手を加えずに掲載しています。くらぶや札響への意見・感想をお待ちしています。

そういえば、Fan Networkにに投稿してくださったM.S.さん、コンサートホールのトイレについてご意見を述べられてましたね。3階にはトイレはありません。急を要する際には、ちょっと不便ですね。　（いちろう）

次号の「札響くらぶ」は11月発行の予定です。